



九曜紋の考察から

「九曜紋」（くようもん）とは、熊本県民にとっては、とても慣れ親しんでいる家紋である。社会人であれば、ほとんどの人たちは、それが細川家家紋であることを知らぬ人はいない。一昨日、紅葉の名所である旧細川刑部邸庭園（12月5日まで無料開放）を散策しながら、「九曜紋」の提灯や瓦などを撮影し、ふと思い出したのだった。

一つは、現代社会における「家紋」の経済効果である。江戸時代の肥後藩主であった細川家の家紋について、Googleなどで「九曜紋」で検索すると、その経済効果が絶大なことが窺い知れる。美味しそうなお菓子の写真等がわんさと抽出され、昔の和のデザインが、今も尚、脈々と生き続けている。

二つは、特に名だたる武将たちの家紋を見てみると、左右対称のものがほとんどだ。とてもシンプルなものから複雑なものまで、多種多様。そのデザインを最初に考案したのは誰なのか知る由もないが、長年にわたり、その一族の威風なる存在を諸国へ伝えるシンボルマークやピクトグラム、アイコンとしての役割を果たしてきたと言える。

今の時代でも、車のエンブレムを眺めてみると、特に高級外車については、インパクトのあるアイキャッチ能力を秘めている。跳ね馬であれば、ボルシェ、フェラーリ。ステアリングイメージであればメルセデス。輪っかが4つであればアウディと、瞬間的にメーカーイメージが伝わり、それぞれのフォルムに魅了される。

しかし、日本車のエンブレムで好印象を与えるものは、なかなか見当たらない。敢えて意表を突くものとしては、スバルの「六連星」（むつらぼし）ではないか。このイメージは、国内外で「スバリスト」と呼ばれる人たちに、この上なく愛され、親しまれていると聞いたことがあった。また、バイクであれば、ヤマハの「音叉」エンブレムが意表を突く。

このように家紋やシンボルマーク、エンブレムなどを考察すると、その家系なり企業なりの歴史と伝統を窺い知るところが、実に面白い。読者の方々も、手隙の時にでも、ご自分の家紋の歴史を辿ってみると、何か新たな発見があるのかも知れないと考える次第。（筆者の母方の家紋「梅鉢」により新たな発見があった）

話は前後するが、熊本銘菓に「九曜紋」を使った美味しい「五十四万石」がある。実は、藩主が加藤家から細川家に渡り、後々の石高は九十万石以上あったと記した書籍を発見。加藤清正の治水事業の賜物に違いないが、江戸幕府への申告は「五十四万石」のまま。その事実関係を調べてみても新たな発見があるかもと・・・。

※因みに、熊本ホテルキャッスル1階レストラン名は、「ダイニングキッチン九曜杏」である。

(2021.11.28 News)

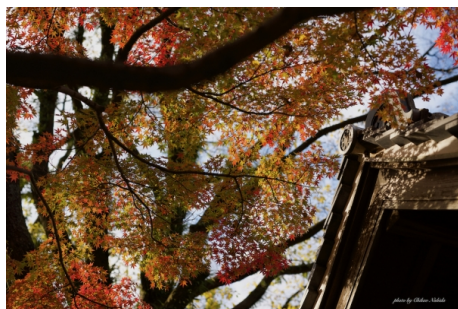


旧細川刑部邸も紅に染まる



紅葉のメッカ、「旧細川刑部邸」（熊本市）。紅色に埋め尽くされた同邸の庭には、平日にも関わらず、一眼レフカメラやスマホを片手に、多くの観光客が訪れていた。先般、山鹿市の康平寺、日輪寺と紅葉を求めて取材で足を運んだが、同邸の紅葉はライトアップなどもあり、すこぶる絵になる。

なかなか夜間に足を運び入れ、ライトアップを撮影することがないが、一度だけ撮影をしたことがあった。太陽光に透ける紅葉も素敵だが、ライトアップも乙なもの。時間があれば、超広角レンズでも持参して、美しいイルミネーションを撮ってみたいものである。



熊本地震から5年7か月が経つが、同邸の塀なども、軒並み倒壊してしまった。以前は同邸の中央にある建物へも入ることが可能だったので、手水鉢やらを撮しまくったこともあった。しかし、同邸の庭園を無料開放で有難いが、全て復興するには相当時間が掛かりそうだ。

今回は、筆者の駄文にて旧細川刑部邸の紅葉を解説するよりも、写真をご覧いただき、紅に染まる同邸の庭園のプレビューを願えば幸いとなる。尚、同邸横の有料駐車場に車を預け、氏名と連絡先電話番号を書き込み、検温と手指消毒を、勿論、ウィズマスクで静かに散策いただければと・・・。

※2021年11月19日（金）～12月5日（日）旧細川刑部邸限定無料開放&紅葉のライトアップ

(2021.11.26 News)





紅に染まる日輪寺

本日は、現在ウィークデ이의午前中は、ZOOMによるICT短期集中研修会（11月15日～12月27日）のICT Doctorをしているために、午後1時過ぎにオフィスを出て、簡単なランチを済ませ、熊本県北部の山鹿市にある日輪寺の取材に向かった。

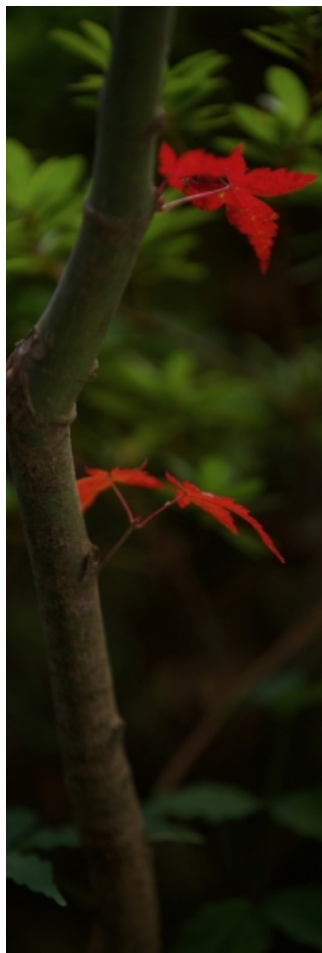
久しぶりの日輪寺。春はツツジ、今は紅葉の季節だが、以前と比較すれば、温暖化の影響もあるのかどうか分からないが、紅葉の時期が大変短くなっている。よって、数年前に撮影した写真の方が、全体的に紅（くれない）に染まっていた感がある。

本日は、熊本市内から国道3号線を北上して現地入りした。行きは45分、帰りは何と1時間10分掛かってしまった。国道の役割を果たしていないところが腹立たしくもあり、県北部への交通インフラがすこぶる脆弱であることが窺い知れる。

山鹿市は温泉と山鹿灯籠祭りで有名な観光地であり、筆者の故郷でもある。温泉は800年の歴史を誇り、昔々、山鹿灯籠祭りは「日本の祭り」でも紹介されるほど、女性が主人公の優雅な祭りである。当時は、毎年8月15日、16日の二日間で50万人（当時の山鹿市の人口は約3万人）ほどの観光客で賑わった。

山鹿市中心部から鹿北町へ向かう国道3号線の右手にあるのが同寺。以前、同寺の精進料理は結構話題にもなっており、知る人ぞ知る、隠れた観光名所である。カメラを趣味とする方には、是非オススメのお寺さんとして、ここにご紹介しておきたい。

(2021.11.25 News)





写真群は、今年5月初旬に依頼を受けて撮影した、リンゴ酒のシードルである。当時、突然のオフ会だったので、撮影場所に迷ったが、熊本ホテルキャッスルに無理を言って、撮影することができた。筆者のイレギュラーな申し出に、マネージャーには大変迷惑を掛けてしまった。

普段のお散歩カメラ的に、あちこちの小さな自然を撮影するのと全く環境が異なり、それなりの照明、三脚、背景などをしっかりと考えた上で撮影に臨まねばならない。この場合、暗い空間で、全て手持ち撮影なので、作品としては納得していないというのが本音である。

しかし、昨日のこと、「ときシードル」の作者より久しぶりにメールが飛び込んできて、筆者が撮影したものの中から、或る雑誌に掲載したと言う。間、髪を容れず快諾した次第。自分なりに拘りを持ち、その作品を大切に扱って撮影したので、すこぶる思い入れがある。

どんな雑誌に、どのような具合に掲載されるのか、とてもとても楽しみにしているが、我儘を申し上げれば、コピーライトについては、しっかりと漢字のフルネームを明記願えれば有難いのであるが・・・。(苦笑)

末筆ながら、昨日はワダ・ミエさん逝去の訃報を聞いて、心が痛んだ。実は、数十年前の話だが、新聞社時代、熊本市内の大手シティホテルにて「映画 利休と衣装」という風変わりなディナー&トークショーを共催した時のこと、その衣装を手掛けたワダ・ミエさんのトークと笑顔を思い出したのだった。この場をお借りして、ご冥福をお祈り申し上げたい。

(2021.11.22 News)





康平寺の紅葉



康平寺（熊本県山鹿市鹿央町）は、紅葉の季節ともなれば、狭い駐車場は溢れてしまい、紅葉を楽しむ観光客で賑わう。しかしながら、最近の国道3号線の交通量はかなり多い。午後2時半頃に熊本市内を出発したが、結局は渋滞に巻き込まれ、午後3時20分に辿り着いた。

同寺近くに住む方々が作業をしていたので、邪魔にならぬよう、同寺左手の山道を登り上からの撮影を終えて、更に、周辺にある紅葉を見定めては、カメラを向けることにした。途中、一眼レフカメラを持ったカメラ女子も現れ、同じく山の上からの撮影を楽しんでいたようだ。

以前同寺を訪れたときは、銀杏の葉が黄金色の絨毯を敷き詰めたように、寺全体を覆っており、とても美しかった印象が強い。しかし、今回は時期的に1週間ほど早すぎたのか、紅葉が中途半端で、以前の日本昔話に出てくるような、色鮮やかな紅葉ではなく、少々残念な訪問となった。

熊本市内から車を走らせれば、渋滞がなければ、僅か35分ほどで行けるので、是非一度訪ねられてはと。ちなみに、同寺は紅葉のみならず、康平寺仏像収蔵館は観光スポットとしても人気があり、平安時代に作られたという地藏菩薩立像など30体ほどが所蔵されている。

(2021.11.19 News)